

伝統的な言語文化の再話作品の諸相

—小学校国語科教材「いなばのしろうさぎ」の場合—

原 田 留 美

新潟青陵大学看護福祉心理学部福祉心理学科

Various Retellings of a Japanese Tale Found in Traditional Linguistic Culture

:The *Inaba no Shiro Usagi* in Elementary-School Japanese-Language Education Textbooks

Rumi Harada

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

要旨

新学習指導要領に基づいて編集された光村図書出版・教育出版・三省堂各社の小学校国語教科書に掲載されている「いなばのしろうさぎ」の再話作品を比較検討したところ、以下のような特徴が見出せた。

光村版はオオクニヌシ中心の物語で、登場人物の個性や心理の起伏を丁寧に描いており、登場人物の気持ちにより添って読み進めていく作品である。教育出版版は兎中心の物語である。登場人物の描き方がシンプルで、古い説話の雰囲気を楽しむに適した作品である。三省堂版は、時系列通りの物語展開になっている。より幼い子どもにもわかりやすい作品で、主人公は兎である。

このように、同じ古事記説話を元にしていても、作品の個性にかなりの違いがあることがわかった。

キーワード

伝統的な言語文化、再話、いなばのしろうさぎ、小学校国語科、学習指導要領

Abstract

The present paper compared versions of the Japanese tale *Inaba no Shiro Usagi*, as retold in the elementary-school Japanese-language education textbooks of three publishers (*Mitsu-mura*, *Kyoiku-shuppan* and *Sansei-do*), published in accordance with the New Course of Study. The following characteristics were seen in these retellings of the traditional story:

The *Mitsu-mura* version revolves around the traditional main character, called *O-kuni-nushi*. Careful portrayals of the personalities and motivations of various characters in the story permit readers to understand and identify with these characters. In the *Kyoiku-shuppan* version, the main character becomes the rabbit in the story. Simple character portrayals in this version allow the reader to enjoy its traditional “fairy-tale feeling.” The *Sansei-do* version presents the development of the narrative in clear temporal sequence, and hence would therefore likely be comprehensible even to younger listeners and readers. The rabbit is again the central character.

In spite of each of the above purporting to be simple retellings of the traditional *Kojiki* tale, it is clear that each of these representations of the original story possesses its own unique narrative characteristics.

Key words

traditional linguistic culture, retold stories, Inaba-no-shiro-usagi, Japanese language in elementary school, Course of Study

はじめに

平成23年4月、各社の新しい小学校国語教科書が出そろった。うち低学年向けのものでは、新学習指導要領の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を踏まえ、何らかの形で日本の神話が取りあげられている。学習指導要領改訂に連動して近年、日本の神話絵本出版の動きもあるものの、それらが幼児教育の場等で広く扱われているとは言い難く、おそらく多くの子ども達は、小学校国語科の授業を通して初めて本格的に日本の神話と親しむことになるであろうことが推測される¹⁾。

しかし日本の神話の原典は古典文学作品であるため、小学校低学年向け教材として用いる場合には当然ながら再話作品となる。すなわち原話が同じであっても、発達段階や教科書編集方針、再話者の文学的価値観等により多様な再話作品が構成されることになる²⁾。はたして今回、小学校国語教科書発行会社五社のうち三社が古事記の再話作品「いなばのしろうさぎ」を掲載しているが、いずれも特徴を異にする³⁾。よって本稿ではそれらを比較検討し、多くの子どもたちが初めて出会うことになるであろう日本の神話再話作品「いなばのしろうさぎ」の多様性について作品論の立場から考えてみたい。以下、三種の「いなばのしろうさぎ」を各々光村版、教育出版版、三省堂版と呼ぶことにする。ただし三省堂版は平成23年6月現在未刊行のため、教師用指導書付属のCDを参照した。

なお、各教科書における当該作品の扱い等については、次のような差異が見られる。まず、教育出版版と光村版は2年生用教科書の上に掲載しているが、三省堂版は1年生用教科書の下に掲載している。また、教育出版版と三省堂版は子ども自ら読む通常の教材として位置づけているが、光村版は第一義的には教師の読み聞かせを子どもが聞くかたちで用

いる教材として位置づけている。さらに、光村版と三省堂版は書き下ろし作品であるが、教育出版版は既刊書籍に掲載されているものを用いている⁴⁾。

既に述べたように、本稿の目的は「いなばのしろうさぎ」各再話の特徴を考えることにあるが、考察の手順としてまず2年生用教科書掲載の教育出版版と光村版について比較検討する。その際注目するのは、物語の始めと終わり、ならびに登場人物の描き方についてである。古事記では「いなばのしろうさぎ」はオオクニヌシの物語の一部として位置づけられており、小学校低学年向けに再話する場合には、前後の文脈から切り離し単独の物語として子どもたちが理解できるようにする必要があるが、物語の始め方と終わり方に注目することで、各再話が「いなばのしろうさぎ」をどのようなものとして古事記から切り離し子どもたちに親しませようとしているかが見えてくると考える。また、原典の古事記では登場人物に関しては簡素な記述があるのみで、心理の起伏や性格等に関する詳細な記述はない⁵⁾。ゆえに子ども向けに再話する場合には、子どもたちが興味を持てるように登場人物を肉付けする必要があることになるが、原典がシンプルである分、人物の描き方の自由度は高く、結果としてそれぞれの再話の特徴、差異がそこに表れやすくなると考える。登場人物の特徴や個性の描き方は、特に幼い読み手にとっては物語の印象を左右する重要な要素であると考えるので、この点にも注目することとする。

続いて、教育出版版と光村版の比較検討結果を踏まえて、1年生用教科書に掲載されている三省堂版について見ていくこととする。

なお、先述の通り光村版のみ読み聞かせ用教材として位置づけており、他とは相違が見られるが、巻末に付録として全文が掲載されており、子どもたち自らが読んだり、また、子ども同士で読み聞かせを行うなどの活動に

つなげる意図のある記述があるところから、子ども自らが読むことが妨げられているわけではないと理解される。⁶⁾ ゆえに位置づけの違いについてはひとまず保留した上で比較・考察していくこととする。

また、再話作品によって登場人物の呼び方や表記に違いがあるが、混乱を避けるため、本論では引用部分を除き原則として兎、ワニザメ、オオクニヌシ、兄弟神と書くことにする。物語のタイトル表記については「いなばのしろうさぎ」⁷⁾で統一する。引用部のルビは省略した。

I 物語の始まりと終わりについて —光村版と教育出版版の比較—

はじめに、中川李枝子による再話作品である光村版の始まりと終わりについて見ていく。中川は「新しい指導を考える会」による『実践提案』で次のように述べている。⁸⁾

まず、原典の『古事記』をそのまま訳したのでは、人名や話の背景など複雑で難しくなってしまう。そこをわかりよく表現するために、書きだしと結びにいちばん苦労しました。書きだしでは、「むかし、むかし、大むかし」「八十人ものかみさまの兄弟」などと表現することで昔話とは違ったもつともつ昔のこと、神話ならではの感じを出したつもりです。結びも、原典にそって、ここまででひとまず完結した話になるようにしました。

神話と昔話を厳密に区別することや成立の前後関係を見極めることは困難である。なぜならば、実態としては両者は互いに影響し合いつつ成立・伝承されてきたという関係にあるからである。⁹⁾ また、日本の神話に關係する昔話は日本のものとは限らない。「いなばのしろうさぎ」にある、陸上の動物が鰐をだまして踏み石代わりにするというモチーフは、南アジアの国々等の昔話にも見られる。¹⁰⁾ 日本の

神話は様々な要素を含みつつ成り立っている。しかしこのような成立論を巡る課題はさておき、一般的に、世界の成立や起源に神が関与する物語としての神話に、時・場所・固有名詞とは関わらずに語る昔話より古いことを語るものという設定を認めることはできよう。「昔話とは違ったもつともつ昔のこと」を語るという神話ならではの設定を意識し、中川は作品冒頭で「むかし、むかし、大むかし。」と畳みかけるような表現を用い、さらにこの一文のみで一段落を構成することで含みを持たせている。これらの工夫によりわかりやすいのみならず、聞き手を物語に引き込む冒頭となっている点を光村版の特徴の一つとして認めたい。

光村版では、上のような書き出しのあとは次のようになっている。

いづもの国に、八十人ものかみさまの兄弟がいました。そして、自分こそ、国をおさめるのにふさわしいと、たがいに力をきそい合っていました。でも、すえっ子のオオクニヌシだけは、あらそうことをこのみませんでした。兄さんたちは、弟をいくじなしとわらい、しごとを言いつけては、こきつかいました。

ここでは、出雲国では統治権を巡り多くの兄弟神が競っていたことを述べつつ、オオクニヌシという神の特別性を、固有名詞の紹介と他の神々との相違点「あらそうことをこのみませんでした。」に触れることで印象づけている。つまり、この作品の枠組がオオクニヌシの物語であることが読み手に伝わるよう配慮されている。さらに、オオクニヌシを含む神々が求婚のため因幡国に赴いたことも、続く部分で明らかにされている。

物語全体を通しての言葉の量的な面にのみ注目するのならば、この作品では多くの筆が兎について費やされている。けれどもオオクニヌシとその兄弟神について冒頭で丁寧に触れられているため、読み手は自然とオオクニ

ヌシを意識しつつ物語を読み進めていくことになる。このことは、物語の最後の記述と対応している。オオクニヌシが兎に、むしろれた毛を元通りにする正しい方法を伝えた事を踏まえて以下のようにになっている。

それからというもの、「オオクニヌシこそ、八十人の兄弟の中でいちばんすぐれた方だ。」と、世につたわるようになりました。

「いなばのしろうさぎ」というタイトルではあるが、光村版はオオクニヌシの話として展開されてきたことが改めて確認できる結末となっている。

次に、教育出版版の始まりと終わりについて。

この作品の出典絵本は、「いなばのしろうさぎ」とそれに続く「オオクニヌシの根の国行き」からなるが、教科書には「いなばのしろうさぎ」のみが掲載されている。

この教育出版版の冒頭は「いずもの国からおとなりの いなばの国へ 行く とちゅうの 海岸を、八十人の 兄弟の かみさまが、行列を 作って 歩いて いました。」となっているが、やや唐突な印象が否めない。一方、絵本にはこの前に次の文がある。

これは むかしの ものがたりです。おおくにぬし というのは、いずものくにのかみさまの なまえです。

そして むかしは、うさぎでも わにでも ねずみでも みんな ものをいうことが できました。

この部分を削除した理由は教師用指導書には記載されていないが、一つには「ねずみ」の語が含まれているためではないか。絵本には根の国行きの部分もあり、ねずみはそこに登場し重要な役割を果たす。しかし教科書にはその部分がないため、登場しないねずみについての言及を含む冒頭部分を掲載すると、子どもたちが混乱すると判断されたのではないかと推測する。また、「おおくにぬし と

いうのは、いずものくにのかみさまの なまえです。」と、いきなりオオクニヌシの名が出てきているが、これは絵本のタイトルが「おおくにぬしのぼうけん」であることを踏まえての表現であろう。教科書ではタイトルが「いなばのしろうさぎ」になっているため、この部分も教科書の作品とはそぐわないものとなる。以上の理由から絵本の冒頭部分が削除されたのであろう。結果、教科書に掲載された物語の始まり方はやや唐突な印象を与えるものとなった。

ただ、見方を変えるのなら、このような始まり方は物語への発展的関心を読者に抱かせることにつながるものと評価できる面をもつともいえるのではないかと考える。なぜ神さまたちは出雲から因幡へ行こうとしたのか、この後オオクニヌシや兄弟神たちはどうなったのか等々の疑問を子どもが抱くことも予想されよう。教育出版版は、作品としての完結性に課題を持つが故にかえて、「いなばのしろうさぎ」にとどまらない古事記の他の説話への関心を呼び起こす可能性のある作品ではないかと考えるものである。

以上、物語の始まり方について、教科書掲載作品と出典絵本との比較を試みたが、教育出版版の始まり方の特徴は光村版と比較するとより明確になる。光村版では冒頭、オオクニヌシとその兄弟神の関係や、神々が因幡に出向いた理由などが具体的に述べられているが、教育出版版にはそのような記述はなく、先に引用した部分に続いてすぐにはだかの兎が登場している。オオクニヌシの名も、兎と会うまで出てきていない。光村版と比べてオオクニヌシの印象は薄く、読み手は兎の物語という印象を強くもって読み進んでいくものと推測される。さらにこの印象は、作品の最後でも補強されると考えられる。教育出版版では、オオクニヌシの助言で兎の体が元に戻った事を述べた後に「—これが いなばの しろうさぎです。」となって終わっている。

るからである。

教育出版版を読む場合、読み手はまず題名「いなばのしろうさぎ」から、兎の物語であろうことを予想する。そして兎を中心とした物語を読み進めた後、最後に「—これが いなばの しろうさぎです。」の一文を目にし、物語を読み終える。タイトル、物語展開、締めくくりの言葉、それらのすべてが、兎を意識したものとなっている。話の始まり方がやや唐突であるにもかかわらず、それほど違和感なく読み終えられる作りになっていると認められよう。子どもたちも、完結したひとまとまりの物語として受け取ると考えるものである。¹¹⁾

以上、光村版と教育出版版の始まりと終わりについて見たが、前者はオオクニヌシの、後者は兎中心の物語として構築されているという点を確認しておきたい。

II 登場人物の描き方について —光村版と教育出版版の比較—

前節で、光村版がオオクニヌシとその兄弟神について冒頭で丁寧に触れていることについて指摘したが、これはオオクニヌシやその兄弟神に関する情報量が多いということである。ゆえにそこに着目し、オオクニヌシ等がどのように描かれているかについて整理するに、次の三点が見いだせる。

- ・兄弟神は、統治権を巡って競い合っていた。
- ・オオクニヌシは争いごとを好まない質であった。
- ・争いごとを好まぬオオクニヌシを、兄弟神は嘲笑い、旅の荷物を持たせるなど家来扱いしていた。

ここには、穏やかなオオクニヌシと、権力欲が強くて荒々しい、末弟を見下す兄弟神という対比が認められる。子どもたちは物語の冒頭から、両者の違いを意識していくことに

なる。またこの違いは兎への対応にも表れている。兄弟神は毛をむしり取られて震えている兎を見て「これは、おもしろいうさぎだ。からかってやろう。」と思い「海に入ってお水をあび、つめたい風に当たるとよいぞ。」と誤った治療法をわざと教える。これに対してオオクニヌシはまず兎に「どうしたのかね。」と優しく尋ね、事情を聞き終わった後も、「おお、かわいそうに。」と言い適切な治療法を伝える。傷ついた兎をおもしろがってさらに傷つける兄弟神と、兎の話を受け止め正しい治療法を伝えることで心身ともに兎を癒したオオクニヌシの違いがここでも明確に示されている。よって読み手は、物語の最後の一文「それからというもの、「オオクニヌシこそ、八十人の兄弟の中でいちばんすぐれた方だ。」と、世につたわるようになりました。」を自然に受け取ることができることになる。さらに、最も侮られていた存在が実は最も優れた存在であったという逆転をも楽しめる構造となっている。

このように、光村版ではオオクニヌシと兄弟神の人となりの違いが明確に示されており、結果各々の人物像の輪郭が読み手に強く印象づけられるものとなっていると考える。

一方教育出版版の冒頭では、オオクニヌシや兄弟神の人となりについて触れられておらず、兎と出会う場面がすぐに出てくる。オオクニヌシと兄弟神、それぞれのイメージを予め持つことなく、兎の動向に注目していきやすい作りになっている。そして、兄弟神と兎との関わりは次のようになっている。

すると、うさぎが 一びき、はだかで
ふるえて いました。八十人の 兄弟は、
「海の水で 体を あらって、それから
風に ふかれて よく かわかせば、そ
のうち 毛が 生えて くるさ」
と言って、みんな わらいながら そばを
通って いました。

うさぎが 言われた とおりに する

と、しおみずが かわいて くるにつれて、風が あたると、体じゅう ひりひりして きました。うさぎは いたくて たまらず、ころげながら おいおい ないて いました。

兄弟神がわらっていたこと、そして彼らの助言に従った兎がさらにひどい目に遭ったことから、兄弟神の助言が親切心からのものではなかったことを読み手は自然に推測することになる。兄弟神の助言に悪意と言えるようなものが認められる点では光村版も教育出版版も共通している。けれども、この点の読み取りが読み手の推測に委ねられるところのある教育出版版と、作中に「おもしろいうさぎだ。からかってやろう。」と明確に述べられている光村版とでは、受ける印象の強さが異なる。

印象の強さに差があるのは、オオクニヌシに関しても同じと考える。オオクニヌシの人柄について冒頭で言及する光村版に対し、教育出版版ではそれは兎の言葉を通して簡単に伝えられるのみである。該当部分を次に引用する。

「うさぎくん、どう したんだい？ わけを 話して ごらん」

と、おおくにぬしが やさしく たずねました。

うさぎは 赤い目を ぱちぱちさせて、

「あなたは しんせつな かたです。

じつは こういう わけなんですよ。」

ひどい目に遭っている自分の状況について「優しく」尋ねてくれたから「この人は優しい」と兎が感じたという以上のことは、ここからは伝わってこない。

以上、光村版と教育出版版の、オオクニヌシと兄弟神の描き方の違いについて見たが、登場人物の人となりと比較的多くの筆が割かれていることでオオクニヌシと兄弟神の個性の違いがより際立っている光村版に対し、両者の個性の違いをおさえつつもそれに関する

言及が多くないために比較的あっさりとした描き方となっている教育出版版という違いが見出せると考える。

次にワニザメの描き方の違いについて見てみたい。光村版では、数比べをしようと兎から持ちかけられたワニザメは、「そりゃいい。しかし、どうやるのかね。」と受けており、兎の提案に興味を寄せている様子が伝わってくる。さらに、「かんたんだよ。」とその方法について提案してみせた兎に対して、「なるほど、うさぎさんはかしこい。」と感心している。兎に比して大きくどう猛なワニザメのイメージに反し、お人好しの印象をあたえるやりとりと言えよう。しかし数比べの終盤、兎にばかにされたワニザメは「おこっ」てかみついている。ワニザメの心理の移り変わりが読み手に伝わる書き方となっている。

これに対して教育出版版のワニザメは、印象を異にする。兎とワニザメとではどちらが数が多いと思うか、と兎に問いかけられたワニザメは「さあ、わからないね。」と答える。数比べの方法を兎から提示された際には、しばらく考えた後に「めいあんだ、やってみよう。」と評価し、受け入れている。光村版のワニザメと比べると冷静な印象を受ける。兎に馬鹿にされた場面でも、ワニザメの感情についての言及はなく、兎が「あつというまに、そいつが ぼくの 毛皮を はぎとって しまったのです。」と述べるにとどまっている。ワニザメの心理の起伏をわかりやすく伝える光村版と、そのような点には深入りしない教育出版版という違いが指摘できよう。

なお、兎像については両者にあまりはっきりとした違いは見出せないものの、兎がワニザメに数比べを持ちかける場面において、教育出版版では「すると、めいあんが うかびました。わにの やつを だまして やろうと かんがえたんです。」、光村版は「わに

のせなかを思いつきました。」となっている点が異なっている。

山場においては両者とも「だます」という動詞を使って兎がワニザメを馬鹿にしているが、教育出版版の方が「だます兎」と「だまされるワニザメ」の対比をより明確に提示していると言えよう。

以上、二種の再話作品の人物の描き方の違いについて見てみたが、登場人物の個性や心理の起伏についての描写が豊かな光村版は、登場人物の気持ちに添って読み込みやすい作品と言える。一方教育出版版は、登場人物の心情の起伏についての細かい言及が少ないためパターン化された人物像として提示されていると考える。このような描き方は、「いなばのしろうさぎ」の出典である古事記説話に近い雰囲気を感じさせるものである。教育出版版は、現代創作児童文学などとは傾向を異にする説話的な雰囲気を楽しむ作品であると考えられる。

Ⅲ 三省堂版について

再話者はみやかわひろである。既述のように「いなばのしろうさぎ」を1年生の教材として配置している点が特徴的である三省堂版であるが、物語構成等において他二社のものとは大きな違いを見せている。他二社では、物語の流れが以下のようになっている。

- ①オオクニヌシと兄弟神が因幡国への旅に出る。
- ②兄弟神が兎に会い、助言する。
- ③兄弟神の助言をいれた兎がひどい目に遭う。
- ④オオクニヌシが兎に会う。
- ⑤兎がこれまでのいきさつを語る。
- ⑥オオクニヌシが助言する。
- ⑦兎の傷が癒える。

これに対して三省堂版は以下のようになっている。

- ①兎がワニザメをだますが失敗して毛をむしられる。¹²⁾
- ②兎が兄弟神に会い、助言を受ける。
- ③兄弟神の助言をいれた兎がひどい目に遭う。
- ④兎がオオクニヌシに会う。
- ⑤オオクニヌシが助言する。
- ⑥傷が癒え、兎はオオクニヌシに感謝する。

光村版・教育出版版は、オオクニヌシ等の旅立ちから話が始まり、兎がオオクニヌシに会った後にいきさつを語るところで回想場面となっている。これに対して三省版は時系列の順に物語が展開されており、この点に大きな特徴を認めることができる。

幼い子どもの場合、物語構造が複雑だと理解の妨げになる可能性がある。光村版・教育出版版のように物語途中に回想場面が挟まることによる一時的な時の遡りがあるより、時系列順に展開する方が物語構造としては単純になりその分わかりやすくなる。昔話や神話の絵本でも、想定とする子ども読者の発達段階に合わせて話のつくりや語り方等を変えることがまま見られるが、三省堂版も同様の配慮によりこのような形で再話がなされたものと推測する。

このような構造上の特徴は、三省堂版の登場人物の重み付けに影響を与えている。時系列順の物語展開となっているため、オオクニヌシについて触れられるのは物語の後半になってからである。一方兎は物語の始めから終わりまで登場している。三省堂版では一貫して兎に寄り添って物語が展開していると言える。さらに、オオクニヌシと兄弟神の関係や出自、因幡の国に来た理由などについても一切語られない。オオクニヌシや兄弟神は、光村版は無論、教育出版版と比べても影が薄い。

これに加え、三省堂版では最後の場面でも焦点が当てられているのは兎である。

「ありがとうございました。」
ウサギは、オオクニヌシノミコトが ある
いて いった ほうを むいて、おれいを
いいました。

ふかく ふかく あたまを 下げて、な
んべんも なんべんも、おれいを いった
のでした。

Iで見た通り教育出版版も兎中心の物語だが、冒頭で出雲から来た兄弟神について兎よりも前に触れているため、徹底して兎に寄り添っている印象を与えにくい。これに対し三省堂版は明確に主人公を兎としていると言え、この点に違いが見出せると考える。

以上のように、三省堂版は三作品の中では最も兎を重視した作品であるが、そのことは兎の描き方にも影響を与えていると考える。通常、読み手は主人公に気持ちを寄り添わせて物語を読み進んでいくが、その主人公に共感しにくいところがある場合には、読み手のその作品への親しみの気持ちに影響する。この物語の兎はワニザメを欺いて対岸に渡ろうとするのだが、光村版・教育出版版には、「だます」という言葉が使われている。悪知恵を巡らす小賢しさを読み手に印象づける表現と言えるだろう。しかし三省堂版にはその語は使われていない。対岸に届く直前にワニザメを嘲う台詞も「やあい、サメさんたちよ。ほんとうは、こう して、いなばの く にへ わたりたかっただけなのさ。」となっている。「やあい」という囃し言葉は子どもっぽさを感じさせるもので、考えの足りない未熟さは伝わってくるものの、「だます」ほどには悪い感じは与えない。兎に寄り添いやすい言葉が選ばれていると考える。

三省堂版が親しみやすさに配慮している点として、もうひとつ注目したいことがある。光村版・教育出版版は、兄弟神が赤裸の兎に遭遇する場面が物語の発端部分にあり、そこから兎の事情について種明かしがされていく構造になっている。読み手は、「なぜ兎が裸で

倒れているのか」について興味を持ちつつ読み進めていくことになる。一方三省堂版は、時系列順に物語が語られていくため、読み手はこれから兎がどうなっていくのか全く知らないままに話の展開を追っていくことになる。赤裸の兎の事情という、話の展開への興味を引き出す要素なしに読んでいくことになるが、この点を補う工夫が、ワニザメの性格付けに見て取れるのではないかと考える。

三省堂版では、兎とサメとではどちらの方が数が多いか、と兎から問いかけられたワニザメは胸を張って「サメの ほうが おおいに きまって いるだろう。」と答えている。ここには兎に対するワニザメの、自尊心から生まれる対抗意識を見いだせるが、このことは、引き続いて行われる兎の海渡りの場面に緊張感をもたらしていると考えられる。ワニザメが勝ち負けの結果を強く意識しているであろう事を想像させるからである。

兎の提案にワニザメが冷静に応じている教育出版版では、このような緊張感は強くは感じにくい。また、登場人物の心理の起伏に言及する事の多い光村版では、兎の提案に対してワニザメが「うさぎさんはかしこい。」と素直に感心しており、勝負の行方を強く意識した緊張関係とは異なる雰囲気となっていると言えよう。

兎の真意は対岸に渡ることにあり、数比べはその方便に過ぎない。一方、ワニザメは数比べ勝負の結果に強い関心を抱いている。両者の意識の違いがどのような結果につながっていくのか、幼い読み手であっても無意識のうちにも興味をそそられていくことになるのではないか。果たして、対岸に渡りきる直前にワニザメを馬鹿にした瞬間、兎はひどい目に遭うことになる。三省堂では真相を知らされたワニザメが「おこって ウサギを つかまえると、かわを はいで しまったのです。」とあるが、この怒りは、緊張感が攻撃へと転換されたものと言えよう。光村版でも

ワニザメは怒っているが、こちらはそれまでのゲームを楽しむような雰囲気が兎の裏切りによって一気に破綻したことからくるものといえ、兎が「ゲームを仕掛けた意図」の種明かしをする前と後とでは場面の雰囲気の落差が大きいことが印象に残るものとなっている点が、三省堂版とは違っている。なお、教育出版版にはワニザメの感情についての直接的言及はない

以上、三省堂版の特徴について考えてみたが、いずれもより幼い子どもたちでも物語に親しめるような工夫や配慮とつながるものであると考える。

おわりに

以上、教科書に掲載されている「いなばのしろうさぎ」の三種の再話作品について比較してみたが、以下のような異なる個性が認められると考える。

光村版は、オオクニヌシ中心の物語で、登場人物の個性や心理の起伏を丁寧に描いている。登場人物の気持ちにより添って読み進めていく作品と考える。教育出版版は、兎中心の物語で、登場人物の心理に深入りすることがなくある程度パターン化された人物の描き方が認められ、古い説話の雰囲気を楽しむに適した作品と言えるであろう。三省堂版は、時系列順の物語展開となっているためより幼い子どもでも親しみやすい作りになっている。またそのことにより兎が主人公であることがはっきりとした作りになっており、読み手は光村版以上に兎に気持ちを寄り添わせていくことになるであろう。

なお、今回は作品論の立場から各再話作品について考えたが、作品としてこれだけ個性が違うのならば、教材としての扱いにも影響が全く及ばないということは考えにくいのであるまいか。小学校低学年の授業では、微に入り細に入りという読み込みを行うことはな

いであろうが、とはいえ、授業準備段階で教師が作品研究を行う際には、各再話作品の特徴について十分に検討確認する必要があるのではないかということ、最後に申し添えておきたい。

注

- 1) 『心をそだてる松谷みよ子の日本の神話』や『いなばのしろうさぎ』等。
- 2) 日本の神話を低学年向け副教材に用いる場合の課題等については以下で考察を試みた。原田留美、日本の神話を補助教材として扱う場合の問題点について—「いなばのしろうさぎ」の場合—、新潟青陵学会誌、2010；第3巻第1号：21～31。
- 3) 教育出版版は教科書63頁、光村版は『学習指導書2上たんぼぼ』120頁、三省堂版は『学習指導書下』163頁に、出典が古事記であることが記されている。各教材の違いの概略的なところについては、次の文献に指摘が見える。三輪民子、新小学校国語教科書に見られる「伝統的な言語文化」、子どもの本棚、2011；509：19～21。

なお、「いなばのしろうさぎ」が複数の教科書に採用されたことについて、典拠文献から切り離しての単独の話として扱い易い、筋がわかり易い、兎が登場し子どもが親しみ易い等が主な理由と思われるが、このほか、天皇家とゆかりの深い高天原系神話とは別系の出雲系神話の一つであり古事記の神話の中では地方色が強いと見なされているため、日本の神話の多様性を示す話である点も評価されたのではないかと考える。

また、原典でのオオクニヌシは地上世界（葦原中国）を支配統治する格の高い神であり、高天原系神々による支配体制の成立過程とも国譲りを通して関わっている。そもそも古事記の「いなばのしろうさぎ」の話自体が、オオクニ

ヌシの支配者としての資質を証明する機能を持ち、兎も古事記ではオオクニヌシの成功を予言する神である。しかし幼い子ども向け再話作品ではクニの成立を語る古事記の文脈から切り離されて提示されるため、オオクニヌシ・兎のいずれも神格性は薄められ、心優しいオオクニヌシと彼に救われる愚かな兎として描かれることが多い。幼い子ども向け再話作品の読者にとってオオクニヌシや兎は、世界の枠組みの構築に関わるような超人的存在ではないと言える。本稿で扱う三作品もまたこの例に漏れない。

- 4) 教育出版版の原典は福永武彦著『オオクニヌシの冒険』(岩崎書店 1977年)であるが、「著作権継承者と相談のうえ、教科書用に一部を抜粋し、加筆訂正した」旨が『教師用指導書』168頁に記されている。
- 5) 再話作品においては、オオクニヌシは優しい人物で兄弟神は意地悪と理解されることが一般に多いが、古事記にはそのような具体的記述はない。前掲論文2) 参照。
- 6) 教科書119頁。
- 7) 兎について、教育出版版は「しろうさぎ」と表記しているのに対し、光村版は「白うさぎ」、三省堂版は「白ウサギ」となっている。ただし三省堂版学習指導書には、「白」の字をあてることの是非を巡る諸説が紹介されている。(163頁) 筆者は「しろうさぎ」と表記することが现阶段では望ましいであろうと考えている。前掲論文2) 参照。
- 8) 中川李枝子. 小学校国語「国語教育相談室」69. <<https://www.mitsumura-tosho.co.jp/community/community/>>. 2011.6.1. (引用箇所は会員専用ページの「光村コミュニティ」内にあるため、トップページのURLを記載。)
- 9) 三浦祐之. 昔話と神話—古代の民間伝承—. 国文学. 1999; 44 (14) : 36 ~ 40.
- 10) 松村武雄. 日本神話の研究第3巻. 330 ~ 333. 東京: 培風館; 1983.
- 11) 教育出版版は兎中心の作品として読めるが、出典の絵本はオオクニヌシの物語となってい

る。それは題が「おおくにぬしのぼうけん」であること、教科書には掲載されていない冒頭部分でオオクニヌシがクローズアップされていること、さらには教科書には掲載されなかったもうひとつの箇所「八十にんの きょうだいの いちばん おしまいに おおくにぬしが いました。おかあさんのちがう すえの おとうとで、いつも にいさんたちから ばかに されて いました。」からも明らかであると考えられる。この箇所からは、オオクニヌシが他の兄弟神とは異なる注目すべき存在であることを読者は理解しよう。また絵本では、オオクニヌシが「いなばのしろうさぎ」に続く「根の国行き」を経て最終的には国を治める立場に立ったことまでが語られている。絵本総体としては、題名の通りオオクニヌシの物語として構築されていると言える。なお、「—これが いなばの しろうさぎです。」は絵本にもある。古事記にこれに該当する一文があるため絵本に取り入れられたものと推測する。ただし、この一文が果たしている役割は教育出版版とは異なると思われる。既述の通り絵本ではこのあと「根の国行き」の物語が続くが、この一文があることで、前半の話に一つの区切りがついたこと、すなわち次のページからは別の物語が始まっていくことを読者が理解するという作りにもなっていると考えられる。絵本としては長編の本作品ならではの配慮と考える。

- 12) 光村版・教育出版版はワニザメをわにとしているが、三省堂版のみサメとしている。これも、より幼い子どもたちを意識したわかりやすさへの配慮の一つかと考える。

文献一覧

- こくご二上たんぽぽ. 東京:光村図書出版:2011.
- ひろがることば小学国語 2 上. 東京:教育出版:2011.
- 小学校国語学習指導書 2 上たんぽぽ. 東京:光村図書出版:2011.
- ひろがることば小学国語 2 上教師用指導書解説展開編. 東京:教育出版:2011.
- 『小学生の国語』編集委員会編. しょうがくせいのかくご 1 年学習指導書下. 東京:三省堂:2011.
- 福永武彦. おおくにぬしのぼうけん. 東京:岩崎書店:2009.
- 松谷みよ子. 心をそだてる松谷みよ子の日本の神話. 東京:講談社:2010.
- いもとようこ. いなばのしろうさぎ. 東京. 金の星社:2010.
- 三輪民子. 新小学校国語教科書に見られる「伝統的な言語文化」. 子どもの本棚. 2011;509:19—21.
- 西郷竹彦監修. 小学校二学年・国語の授業. 東京:新読書社:2011.
- 桂聖編著. 教科書新教材の授業プラン小学校 2 年. 東京:東洋館出版社:2011.
- 松村武雄. 日本神話の研究第 3 卷. 東京:培風館:1983.
- 三浦祐之. 昔話と神話—古代の民間伝承—. 國文学. 1999;44(14):36—40.
- 原田留美. 日本の神話を補助教材としての扱う場合の問題点について—「いなばのしろうさぎ」の場合—. 新潟青陵学会誌. 2010; 3 (1):21—31.